

## 覚え書き：わが国のアダム・スミス研究の特色\*

水田洋氏の業績と *Adam Smith's Library: A Catalogue (2001)* から見て

有江 大介

1

私が初めてスミス研究（Adam Smith: 1723-1790）を経済学史・思想史研究の一つの領域として認識したのは、水田洋氏（1919～、現・学士院会員）の講義によります。40年ほど前、1973年前後に、当時名古屋大学に在任中であった水田氏は半期の非常勤講師として東京大学経済学部に通われ、経済学部専門科目の選択科目「アダム・スミスの経済学」の講義を行いました。後に『経済学の成立：アダム・スミスと近代自然法学』（御茶の水書房、1994）を物した新村聡氏（現・岡山大学教授）、『「天文学史」とアダム・スミスの道德哲学』（多賀出版、1995）の著者である只腰親和氏（現・中央大学教授・日本イギリス哲学会会長）などと、番号は忘れましたが同じ教室で私も興味深く水田氏の講義を聴講しておりました。

一般に、経済学の歴史研究（経済学史）は経済思想史と経済理論史に分かれます。日本経済学史学会（堂目卓生会長・大阪大学）は、減少傾向にあるとはいえ現在でも650名という会員数を誇る、世界に類を見ないこの分野の巨大な学会です。経済理論史家 T.W.ハチソンは、日本では経済思想史研究が特別の意義

を持っていると言いました（早坂忠監訳『経済学の革命と進歩』春秋社、1987、原著1978、日本語版前書きv頁）。そして、水田氏の研究はこの経済思想史に分類されます。

当時の授業にも、水田スミス論の思想史的特色がよく現れていました。もちろんスミスは、「ダーウィンの『種の起源』を除いて、今日までに出版されたあらゆる科学書のうちでも最も成功した」『国富論』（1776）により、「あらゆる経済学者のうちでも最も有名」になり（J.シュンペーター『経済分析の歴史』東畑精一訳、岩波書店、①377頁、原著1954）、「経済学の父」と呼ばれています。しかし、「アダム・スミスの経済学」と題された水田氏の講義の主たる関心は、『国富論』にある価格理論（わが国では「価値論」と呼ばれた）や機会費用論や外国貿易論などの経済学の理論的要素ではありませんでした。水田氏は、『国富論』、『道德感情論』（1759）を始めとしたスミスの諸々の著作の中に、欧米に遅れて近代化、産業化を目指す後進国日本が目標とすべき社会の原理的構造を読み取ろうとしていました。それは、人格的に平等な人々によって水平的に構成された民主主義社会としての「市民社会」であり、スミスはそうした社会を支える

\* この覚え書きは、有江大介「書評、あるいは水田洋『アダム・スミス蔵書目録』をめぐって」（『日本18世紀学会年報』（17）、2002、70-74頁）の内容の一部と、第3回アダム・スミス文庫目録刊行準備委員会・科学研究費補助金基盤研究（B）No.23330067 共同研究会（東京大学経済学部資料室、2014年2月1日）での報告「わが国のアダム・スミス研究における水田洋氏の貢献と意義：同感・ノミナリズム・ライブラリー」の一部を統合しそれに加筆したものです。

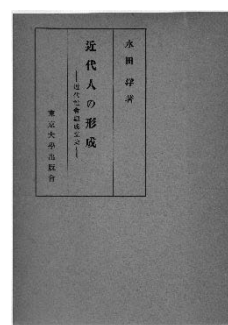
自律的な経済過程を法則的に解明する経済学の父と目されるわけです。同時にスミスは、極めて独自に解釈された「近代」の自由主義的イデオログでもあったのです(『自由主義の夜明け：アダム・スミス伝』国土社、1979；『評論集：クリティカルに』御茶の水書房、1994、130頁)。

もちろんこうした解釈は、第2次大戦敗戦(1945)までのわが国の権威主義的で抑圧的な社会体制への抵抗の意志と経験に裏付けられた志向から生まれています。敗戦後のジャカルタでのボルケナウへの共鳴(『封建的世界像から市民的世界像へ』原著 1934)、一貫するホッブズへの強い関心など、様々な場面で自ら語る旧東京商科大学在学中からの思索と研究の系譜はそのことを物語っています(『社会思想史研究の60年：1933-99』『経済学史学会年報』38号、2000、83-89頁)。実はこうした志向は、水田氏に限ったものではありません。現れ方はそれぞれ異なってはいたものの、一時代を画した経済思想史家群、高島善哉(1904-1990)、大河内一男(1905-1984)、内田義彦(1913-1989)小林昇(1916-2010)、そして田中正司氏(1924～)らとも基本部分では共有された、第2次大戦中から1950年代、特に、高度成長期の始まる1960年代初頭までの“時代精神”を体現したものであったとも言えます。

この時代精神は、欧米、特に英国での反ナチズム、反独裁の役割を担ったリベラリズムではなく、それに代替してわが国戦前の権威主義的な体制への中心的な批判思想となったマルクス主義の影響を大きく受けていました。そのことに呼応して、しばしばスミスは、その労働費用説や生産的労働論などにより、マルクスの労働価値論の名誉ある先駆者と見な

され、時には資本主義社会の疎外を予見する“原マルクス”にさえ擬せられました。内田義彦の『経済学の生誕』(未来社、1953)、岩波新書として普及した『資本論の世界』(1966)、『社会認識の歩み』(1971)でのスミス像などはその典型と言って良いでしょう。内田によって描き出されたスミスは、「旧帝国主義」＝重商主義を批判するブルジョア・ラディカルの社会思想家であり、理論家としては“不十分なマルクス”でした。こうしたスミス解釈は、確かにその時代の日本の知識人に固有の意味を持った一つの“時代の産物”ではあっても、スミスの実像からあまりにも乖離した極めて一面的なものであり、既にその役割を終えていると言ってよいでしょう。

水田氏のスミス解釈の視点は、半世紀前のスターリンの国家社会主義に、今日では公共性なるものに簡単に解消されるものとは異なり、あくまでも個人を出発点としています。それも、予め社会性をアプリアリに備えたというより、自己保存を最大の目的とする自然



的人間としての功利主義的個人です(『近代人の形成—近代社会観成立史』東京大学出版会、1954)。これは当然、水田氏のホッブズへの関心の強さに連なります(水田訳『リヴァイアサン』1-4, 岩波文庫)。水田氏の視点は、ホッブズにすら sympathy の要素を読み込む、“公共性”や“絆”に依拠すれば良しとしがちな近年の解釈とは一線を画するものです。そうした sympathy を「共感」と訳し感情移入的に理解する、日本人の感性に受け入れられやすいいわば“ウェット”な解釈ではなく、想像上の立場の交換と公平な第三者の視

点を組み合わせた独自のメカニカルなスミス sympathy (同感) 論の解釈にも、上述した水田氏の近代的個人から出発する一貫した立場が表出しています(水田洋「アダム・スミスにおける同感概念の成立」『一橋論叢』60 巻 6 号、1968、587-605 頁)。

なお、ここでは、水田氏による近代的個人の「三重分解」論については触れる余地がありません(「近代人の形成と解体」『象』56 号、2006)。

## 2

水田氏のスミス研究のもう一つの特色は、小林昇や内田義彦とは異質の、徹底した文献的実証を伴った思想史研究であるという点です。私自身の経験でも、ケイムズ卿や H.ブレアやスミスについて同時代の評価や評判について何事か表明したときに、「君、それはどこに出ているのかね。典拠は何だ。」とすぐに水田氏から聞き返されたことが何度かあります。実際、500 頁を遙かに超える大部な著作である『アダム・スミス研究』(未来社、1968)では、そのうち 2 割近くが、スコットランド啓蒙やスミス研究の、一見すると地味で無味乾燥な細かい書誌データまで含んだ「アダム・スミス書誌」に充てられています。学術書に索引を付けることすら稀であった時代に、索引に加えて書誌データまでを付加することは学術書のあるべき姿の一端を先駆的に示すものでもあったと思います。確かにそうした情報は一般の読者には不必要なものですが、当該分野の研究者や研究を志す者にとっては貴重な“導きの糸”であって、「アダム・スミス書誌」は英米を始めとした国際的な研究史のサーヴェイ、わが国の研究の軌跡の検討に際しては今なお読む価値のあるものといえます。

このことは、いわゆる大学紛争の時代、名古屋大学で水田氏の講義には閑古鳥が鳴いていた一方で、芝居がかった大言壮語でその講義が大人気となり立ち見まで出ていた平田清明(1922-1995)の『市民社会と社会主義』(岩波書店、1969)が、今となっては jargon の塊の域を出ず読むに堪えない代物と化していることと好対照といえるでしょう。なお、内田、小林から見たスミス研究の意義については、多くの点で見解は異なりますが水田氏との比較もある渡辺恵一氏の近著が参考になります(「内田・小林論争とアダム・スミス研究」『経済学論究』67 巻 2 号、2013、53-73 頁)。

水田氏による、大河内一男との邂逅の 1955 年に始まるスミスについての文献的探求が最初に大きな形となって現れたのが、『アダム・スミスライブラリー：ボナー目録への補遺』(*Adam Smith's library: a supplement to Bonar's Catalogue with a checklist of the whole library*, Cambridge University Press, 1967) でした。これが水田氏の経済思想史分野では稀有の国際的活躍とその評価の出発点となります。以降、『国富論』刊行 200 年を記念して企画されたグラスゴウ版スミス著作集 (*The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith*, 7vols. 1976-1983) の編集と発刊の準備期に重なる国際的なスミス研究の流れの中で、孤軍奮闘する形で水田氏は自らの知見を英米やヨーロッパ大陸での学会報告や英語の学術書の中で表明し続けました。代表的なものは、"Moral Philosophy and Civil Society," in *Essays on Adam Smith*, ed. A. Skinner and T. Wilson (Oxford University Press, 1975) で、これは、水田氏本人の意図を越えて、英米の研究者には階級闘争史観による解釈と映ったようで、以後の“洗練されたマルクス主義者”と

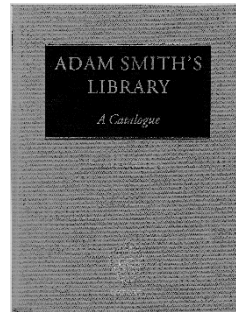
いう水田評の元になったと思われます (C. Berry, *The Idea of Commercial Society in the Scottish Enlightenment*, Edinburgh, 2013, p. 205)。

この後、水田氏は、わが国の実は膨大なスミスとスコットランド啓蒙研究の蓄積の国際的な紹介者としての役割も果たしました。杉山忠平 (1921-1999) との共編著 *Enlightenment and beyond: political economy comes to Japan* (University of Tokyo Press, 1988)、中京大で開かれた日本での「アダム・スミス没後 200 年記念名古屋国際シンポジウム」での日本人を含む各国研究者の報告をもとにした杉山忠平とのもう一つの共編著、*Adam Smith: International Perspectives*, (London: Macmillan Press, New York: St. Martin's Press, 1993) などが挙げられます。2000 年代に入ると、水田氏の次の世代にあたる坂本達哉 (慶応大)、田中秀夫 (京都大) 両氏の編著によるスコットランド啓蒙における経済学の成立についての日本人研究者のみの国際出版がなされるなど (*The Rise of Political Economy in the Scottish Enlightenment*, Routledge, 2003)、水田氏の果たしたパイロット的役割は非常に大きかったと言えます。水田氏自身の国際舞台での研究とその発表は、『アダム・スミス論集：国際的研究状況のなかで』(ミネルヴァ書房、2009) に翻訳してまとめられています。私と観点は異なりますが、坂本達哉氏によるオーソドックスな書評も参照されるべきでしょう (『社会思想史研究』34 号、藤原書店、2010、261-265 頁)。

### 3

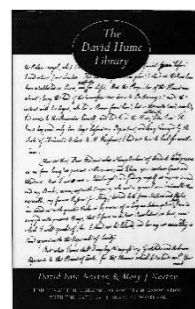
さて、水田氏によるアダム・スミス蔵書目録の決定版、*Adam Smith's Library: A Catalogue*,

edited with an Introduction and Notes by Hiroshi Mizuta (Oxford: Clarendon Press, 2000, xxiii+290pp.; 以下、『水田カタログ』) に触れましょう。



このカタログは、スミスが生前所蔵していたと現在までのところ言いうる蔵書 1810 点の書誌データを、45 年間にわたって世界 31 都市 45 図書館を歴訪・調査し、3 点を除いてすべて現物にあたった上で、各国語の現代表記化、発行年のアラビア数字化等をしながらも、タイトル等の省略・変更を極力排しつつ仔細に紹介したものです。これは、ジェイムズ・ボナー (1852-1941) によるパイオニア的調査にもとづく『スミス蔵書目録』(初版 1894、増補第 2 版 1932)、それへの前掲の『ボナー目録への補遺』(1967)、東京大学経済学図書館所蔵の「アダム・スミス文庫」にありながら十分な調査をされていなかった、スミス自身が作らせた蔵書目録 (1781)、これら全部を下敷きにし、出版ギリギリの時期までに得た情報を加えて作り上げた、いわば決定版と言えます。

また、書誌データの完全記載に加えて、カタログの編者水田氏が重視・強調する 2 つの特徴に触れておく必要があると思います。まず、スミスが蔵書から自分の著作にその内容を引用・言及した場合には、

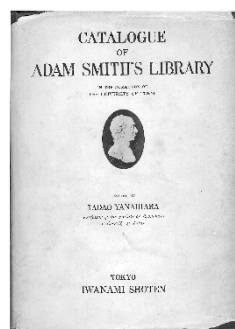


グラスゴウ版『アダム・スミス著作集』に基づき当該部分を紹介している点と、逆に、蔵書にスミスが言及・引用されている場合も同様にそれを紹介している

点です。これらは、研究する側からすると、タイトルと簡単な書誌データのみ記載されている『デイヴィッド・ヒューム蔵書』(D. F. Norton and M. J. Norton, *The David Hume Library*, Edinburgh Bibliographical Society, 1996) と異なり、思想内容の系譜的理解に至便です。さらに、必要と編者が判断した場合には、付加的な書誌情報や他の蔵書との関連、スマスによる利用の度合いなどの簡単なコメントが付されています。引用・紹介をはじめとしたこうした読者・研究者への配慮は、ある面で「諸思想相互のつながりがたちきられ」る危険のある(水田洋『思想の国際転位: 比較思想史的研究』名古屋大学出版会、2000、7頁)、Q. スキナー流のコンテクスチュアリズムへの水田氏の距離感をよく示していると言えます。

この、水田氏の歴史方法論について、カタログ編集に際する文献の扱い方の編集方針にも直結するので、もう少し詳しく述べておきたいと思います。たとえば、『水田カタログ』には、スマスの蔵書を所蔵する世界各国の図書館のリストや蔵書の出版地索引がありますが、ヒュームの目録にはありません。これは、水田氏が先掲の『思想の国際転移』で言う、「[思想は] 国境と時間を越えることで位相を変えていく」(表紙帯)という見地を反映した編集方針であると推察できます。水田氏はこの本の序章でQ. スキナーのコンテクスチュアリズムに内在する「歴史的相対主義」の通俗的受容に警鐘を鳴らしています(4-8頁)。歴史的相対主義では、「思想が歴史的文脈によってつまれて封印されることによって、第一にその思想は不変のもの(歴史的アイデンティティ)とされ、第二に諸思想相互のつながりがたちきられ、第三に諸思想とわれわれ

自身とのつながりもたちきられる」と言います(同上、7頁)。特に第一の点に関しては、「封印による文化財保護」(同上、8頁)と揶揄するほどに、思想に対するスタティックな、したがって現状肯定的な把握の姿勢とディレクタンティズムに対する忌避観が強く表出しています。水田氏にとって、思想とは、あるいは思想史研究とは本来、「近代社会の成立期の社会思想を・・・歴史的に分析することにより、・・・社会思想と社会科学の必然的なむすびつき、社会科学の本質としての実践性を、すこしでもあきらかにしてい」くものなのです(前掲『近代人の形成』1954、1頁)。つまり、思想とは、時代や国を越境しながら常に解体と継承を繰り返すダイナミックな生きた存在と捉えられています。おそらく水田氏によれば、現代においてそれを担保するものは「永久革命としての民主主義」(「高島善哉の社会科学」渡辺雅男編著『高島善哉: その学問的世界』こぶし書房、2000、36頁)を担う、クリティカルな精神を持った市民の実践ということになります。なお、この“生きた思想の越境する国際性”という視点からの業績が、*A Critical Bibliography of Adam Smith*, general editor, Keith Tribe, advisory editor, Hiroshi Mizuta, (Pickering & Chatto, 2002)です。ここではアイルランド、フランス、ドイツ、ロシア、ポーランド、スペイン、ポルトガル、日本、



中国へのスマスの普及の様子が示されています。

以上からして、1920年、新渡戸稲造の寄贈に始まる東京大学経済学図書館所蔵の「アダム・

スマス文庫」、このスマスの旧蔵書カタログ

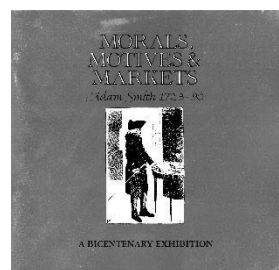
(*Catalogue of Adam Smith Library in the Possession of The University of Tokyo*, edited by Tadao Yanaiharu, Tokyo: Iwanami Shoten, 1951; 以下、『矢内原カタログ』) の新版を作ろうという場合、その編集方針の策定にあたって、水田氏ほど直接的ではないにしても、スミスの蔵書であるが故に不可避免的に新カタログ編集者の歴史意識・歴史哲学が問われることになるのではないのでしょうか。

水田氏自身は日本のスミス研究とスミスの蔵書、およびスミスの自由主義との関係について、次のように述べています。「スミスは手放しの自由放任主義者ではなく、自由競争に内在するルールを想定していた。このルールはハイエクに欠けている観点であるだけでなく、今日崩壊しつつあるいわゆる社会主義が、その前提となった『後進資本主義』の中に持たなかったものである。その点では日本の資本主義も後進資本主義と変わらない」(『アダム・スミス：自由主義とは何か』講談社学術文庫、1997、241頁)に見られるような、水田氏の"遅れた日本にとってのスミス"という視点は、氏のスミス研究の近代主義的性格がよく現れています。

さらに、蔵書自体の意義について水田氏は、思想の越境する国際性という視点から、「スミス流の本格的な自由主義が、日本に定着していないから、日本ではとくにスミスへの関心がつよく、スミスの思想の源流および影響をやる重要な手がかりが、蔵書なのだということができる」と述べています(前掲『評論集：クリティカルに』130頁)。果たして、『矢内原カタログ』にある141タイトル308冊およびその後経済学部図書館が購入したものを加えた「アダム・スミス」文庫計314冊からは何を抽出できるのでしょうか([\[e.u-tokyo.ac.jp/?page\\\_id=485\]\(http://www.lib.e.u-tokyo.ac.jp/?page\_id=485\)\)。](http://www.lib.</a></p></div><div data-bbox=)

#### 4

ところで、アダム・スミスと日本との実は深い関係について、『水田カタログ』のデータの一部と、私自身の経験を記しておきます。カタログの巻末にある、スミスの旧蔵書のエディンバラ大学図書館以外の現在の収蔵場所索引によれば、最も多数を有しているのが何と東京大学経済学図書館です。また、場所のわかっている全27箇所のうち9箇所が日本です。さらに、私がたまたま訪れた、スミス没後200年を記念した「道徳、動機そして市場：



アダム・スミス  
1790-1990」と題する  
国立スコットランド  
博物館の展示(1990  
年7月17日-9月2  
日)では、スミスの

生誕地カーコーディのブースから始まる順路の一番最後の出口に掲げられていたのが、東京証券取引所の巨大なパネル写真であったのです。経済(economy)というキー・ワードによって、現代スコットランド人もスミスと日本には強いつながりがあると認識していたに違いありません。

しかし、その割に、わが国だけでなく英米のスミス研究も書籍タイトルに経済学や市場を掲げながら、必ずしも経済学そのもの、経済理論やその方法論を主題的に扱っている例は少数派であると言わざるを得ません。経済についても市場とモラルとの関連で語られる傾向が、他の歴史上の経済学者の中では顕著なのが特色です(古くは Vivienne Brown, *Adam Smith's Discourse: Canonicity, Commerce and Conscience*, Routledge, 1994 から James R.

Otteson, *Adam Smith's Marketplace of Life*, Cambridge University Press, 2002, Jerry Evensky, *Adam Smith's Moral Philosophy: A Historical and Contemporary Perspective on Markets, Law, Ethics, and Culture*, Cambridge University Press, 2005. Gavin Kennedy, *A Moral Philosopher and His Political Economy*, Palgrave and Macmillan, 2008. など。基本は道徳哲学、政治学、そして神学的テーマ（例えば Paul Oslington, *Adam Smith as Theologian*, Routledge, 2011）などに概括される傾向が強いのと思います。

特にわが国ではここ数十年、元来「アングロ・アメリカにやや固有の問題意識の下で生まれた、そこでこそ意味のある議論」といわれる（永井義雄・近藤加代子「訳者あとがき」、D.ウィンチ『アダム・スミスの政治学』ミネルヴァ書房、1989、259頁；原著1978）スコットランド啓蒙研究における政治思想的枠組みとしてのシヴィック・ヒューマニスト・パラダイムの直輸入の影響が大きかったと言えます。この古典的共和主義の思想に自然法学の視点を加えた解釈により“経済学者スミス”は後景に退き、時にスミスは18世紀の道徳哲学者に限定して理解されることとなります（J. Dwyer, *Virtuous Discourse: Sensibility and Community in Late Eighteenth-Century Scotland*, John Donald, 1987）。その結果、『国富論』は富が効率的に蓄積されて行くために必要な経済システムの理論的な記述をしているより、経済的富裕化は安逸と富と奢侈のもたらす腐敗に帰結するので、英明な「立法者」が理性的な統治を通じて人々を善導するという立法者の科学の書であると見なされることとなります。シヴィック派的な解釈の影響は大きく、田中秀夫・山脇直司『共和主義の思想空間：シヴィック・ヒューマニズムの可能性』（名古屋

屋大学出版会、2006）など政治思想・政治哲学研究として結実すること自体は妥当であっても、これを経済思想領域において、本来シヴィック派的なスミス解釈、啓蒙解釈とは相反するはずの水田氏の卒寿記念として刊行された佐々木武・田中秀夫編著『啓蒙と社会：文明観の変容』（京都大学学術出版会、2011）の基軸視点に位置付けてしまうと、問題が生じます。そこでは水田氏が「アダム・スミスは、利己的個人の相互同感、生産物の等価交換によって、かれが商業社会または文明社会とよぶ近代社会の、自律的秩序が維持されるということ、道徳哲学と経済学によって立証しようとした。」（『近代人の形成と解体』『象』56号、2006）と述べたうち、経済学が消失し、商業社会の展開自体を危険視するパターン的な権威主義が選良の人文的教養・モラルとして残ることになります（前掲『啓蒙と社会』227頁）。

つまり、佐々木・田中編著『啓蒙と社会』には“人文学はあるがサイエンス・理論としての経済学がない”こととなりますが、こうしたスミス研究にも共通する解釈の視点の乖離は、実は先に紹介した日本経済学史学会内部においても顕著に生じています。啓蒙期社会科学の思想史的・人文的解釈が、この学会員の4割近くとなった経済理論史プロパーの研究者にはまったくと言っていいほど理解されない、対話ができないという状況があります。後者の典型的な『国富論』理解は以下に示されます。「スミスの『国富論』は、『道徳感情論』において展開された人間研究を基礎として、市場・成長・貿易に関する理論を構築するとともに、当時のイギリスが直面した諸問題に対して、取るべき政策を提示した書物である」（堂目卓生「経済学の基礎としての

人間研究」『日本経済学会 75 年史：回顧と展望』有斐閣、2010、377 頁)。なお関連して、スミスの自律的経済や市場の発見についてシヴィック的でなく主題的に扱った経済思想史からの見解は、有江大介「アダム・スミスによる自律的経済世界の発見への途」(『エコノミア』45 巻 3 号、1994、19-38 頁)、経済理論への関心は希薄だがそれ以外の経済に向かう諸要素を古典古代から網羅した野原慎司『アダム・スミスの近代性の根源：市場はなぜ見出されたのか』(京都大学学術出版会、2013)などは参考になるでしょう。

実は上述の大きな懸隔は、日本に限らず国際的なスコットランド啓蒙研究、スミス研究の場においても見られます。昨年(2013)夏にパリ大学ソルボンヌで開かれ、私もパネルの司会で参加した「18 世紀スコットランド学会／国際アダム・スミス学会 合同大会」(2013 年 7 月 3-6 日)でも、同様の状況が垣間見られました。18 世紀スコットランド啓蒙研究がほぼ人文系研究者によって担われているにもかかわらず、この大会最大の目玉となったのが大会最終日の最後のセッションのノーベル経済学賞の理論家アマーティア・センによる基調講演 ‘On Smith’s and Hume’s Critique of Imperialism’でした。センは、自らのインドでの体験を紹介した後、スミスとヒュームの著作をまるで 1 週間前に出版された書物を読むように、自然法学もシヴィック・パラダイムも共和主義も何もなく、これまでの研究史とは一切無関係に自らの理論的関心からの解釈を開陳していました。当然のこととはいえ、スミス研究という立場からはやはり大きな違和感が残ります。では、こうした解釈の乖離を眼の前にしたとき、東大所蔵の「アダム・スミス文庫」を媒介にスミスをどの

ように読み、解釈し、また、発信すればいいのでしょうか。

## 5

手がかりは 4 つあります。第一に、スミス自身の多様性を再認識することから始めるべきでしょう。もちろん、スミスは神学、修辞学、言語学、美学、古典、法学、倫理学、哲学、あるいは物理学、天文学など多岐にわたる教養と知識を持った学者でした。それらの総合の上に『国富論』が成立したわけですから、その過程の一端を、300 冊余とはいえ、経済学図書館の「アダム・スミス文庫」の蔵書から推し量ることになります。実際には、『矢内原カタログ』に見る範囲のこの文庫には、農業や交易や通貨に関するものが 4、5 点あるのみで経済学に直接結び付くものはありません。当然、『水田カタログ』を基礎にして行うこの探求の作業は、従事する者にヨーロッパの歴史や経済、文化や宗教、ギリシア語やラテン語、フランス語をはじめとしたヨーロッパ語全般までの、幅広い知識と教養を持っていることを要求します。また、書誌的な専門知識も求められます。その意味では、各分野、領域の専門家を集めた集団的作業として新版のカタログ作りを行うことで、東大の片隅で半世紀以上も忘れられ、埃を被っていた“宝の山”を再び世に出すことができるのではないのでしょうか。

第二に、大英帝国からアメリカ合衆国へと世界の覇権が歴史的に移動してきた結果、アングロ・アメリカ的な物の考え方が“世界標準”として現代世界を覆っています。また、仮にその一面が市場原理主義と呼ばれているとすれば、その主要な源の 1 つもスミスに帰することができるということです。この点で、



マクファーレンは、市場と個人はイングランドでは12世紀まで遡れるほどに古く、それを基に「経済人」を普遍的なものと想定したスミスは正しく、それらは18世紀以降の新しい歴史的産物だと言った K.ポランニーなどの経済人類学者は少なくともイングランドについては間違いだと言っています (A.マクファーレン、『イギリス個人主義の起源』酒田利夫訳、南風社、1997、328頁; 原著 1978)。私はマクファーレンの見解に同調します。そして、『国富論』はスミスの多面的な才能をよく示してはいても、ニュートン主義的方法的な影響も含めて、やはり第一に独立した経済科学書と言えます。「アダム・スミス文庫」が経済学図書館にあることの所以です。やはり、古典派経済学の原点としてのスミス経済学のどの側面が、現代の主流派経済学である新古典派経済学を生み出していくのかに言及する必要があるでしょう。実はこの欠落が、スミス旧蔵書に多くの解説を付しつつも残る『水田カタログ』の弱点の一つなのです。

第三に、既に「アダム・スミス文庫」蔵書はデジタル化され、2013年4月より東京大学 OPAC によってほとんどが WEB 上で閲覧できるようになっています。新カタログはこのことを踏まえた工夫をする段階にあるのではないのでしょうか。現在、日本や諸外国の図書館や研究機関で、所蔵する人文・歴史系文書のデジタル化とその公開が進んでいます。それをベースに、それぞれが、単に閲覧するだけでなく、検索から WEB 討議などの拡張されたサービスを提供することにより、インターネットを経由しての各国研究者による相互利用の便宜が図られています。こうした Digital Humanities と総称される、インターネットとコンピューターと人文科学 (humanities)

とを統合する新たな調査、研究、教育のスタイルを念頭に置いて、新カタログ自体を整備しその利用システムを構築することが今や望まれていると思います (参照:「人文情報学推進協議会設立シンポジウム報告要旨集」The Japanese Association for Digital Humanities, 12-14 September 2011)。実は水田氏自身が、この点からすると『水田カタログ』は「労多くして無駄も多かった」と述懐しているのです (『象』77号、2013、116頁)。

最後に第四に、以上のそれぞれを実現しようとする際に、越境する国際性の到達点としての世界の外れ、極東の島国である他ならぬ日本からの発信という視点を追求するべきでしょう。この姿勢が「アダム・スミス文庫」の新カタログ編集にあたって、結果として紡ぎ出されるスミス像に何らかの形で具現化されることを望んでいます。それがおそらく、今なお世界最大のスミス研究者数を誇る我々日本の研究者の責務であると考えます。

なお、現在日本ピューリタニズム学会会長を務めている私は、宗教書が経済関係書より多く文庫に含まれていることに注目します。西欧思想や哲学を理解するにはキリスト教を始めとした宗教的背景について適切に配慮することが不可欠であり、水田氏のスミス研究でも十分に触れられていません。この点をわが国の思想史や哲学の分野の研究の弱さと考えている私としては、スミスの宗教論についても文庫蔵書の検討から何事か抽出されることを期待しています。(了)

(ありえ だいすけ：横浜国立大学・国際社会科学研究院教授)